

学びたいことから選ぶ大学
学部・研究室レポート
 大学の学部・研究室の「今」を紹介します。



学校で学んだことを活かして生きていきたい そんな教育を再構築していきたい

発達心理学をベースに、いまを生きる子どもたちの行動や心の研究、刑事裁判に巻きこまれた人などの供述分析に携わっておられる、奈良女子大学の浜田寿美男教授。今回は、教授が取り組む「子ども学」の現状や学校教育の課題、親として大人としての子どもとの接し方など、さまざまなこととお話いただきました。



奈良女子大学 文学部 人間行動科学科 人間関係行動学講座 教授 **浜田 寿美男**さん



附属幼稚園での実習





事件を通じて見えてきた
「子どもの障害」を扱う難しさ

先生が扱っておられる「子ども学」
について教えてください。

「子ども学」とひとりで言っても、その論点はさまざまです。歴史的に見て、子どもがどんな風に地位を築いてきたかというテーマもあるでしょうし、教育問題を軸にして研究するということもあります。

私は、もともと発達心理学を専門にしていました。そこから子どもの成長発達、障害を持つ子どもの発達、子どもの犯罪や非行といった社会問題などを扱うことが多くなり、障害を持つ子どもの事件の供述分析に携わったことから刑事裁判にも関わるようになりました。

どのような事件に関わってこられたのですか。

1974年に兵庫県西宮で起きた、甲山事件をご存知でしょうか。

知的障害児のための施設で2人の子どもが行方不明になり、その後溺死体

となって発見されたというものです。

結果的には事故という結論になりましたが、当初、事件ではないかとされ、職員が逮捕されました。この案件は、知的障害を持つ子どもの供述の信憑性が焦点となるものでした。

どんな問題もそうですが、世間での見え方とは、内側に入ってみると、随分違うことが多いのです。

最近では、子どもに関わる発達障害アスペルガー症候群やADHDなどがかなり知られてきたことで、学校現場で支援教育が行われることも増え、専門的に携わる人たちの理解はより深いものになっていきます。

ただ、これは両刃の剣でもあり、結果的にそれが、その子どもを他の子どもと区別することになってしまいうケースもあり。良かれと思つての対策が、区別・差別につながってしまう。事件を起こした子どものなかには、実は世間や社会から浮いてしまったからだった、という可能性もあるのです。

周囲の親御さんも、自分の子どものことだけで、精一杯ですから、何か問題を抱えている子どもと、自分の子ども

もが関わることは望みません。

私たちは現状の対策が、子どもを「子どもが生きる世界」から遠ざけてしまっていると気付くべきなんです。

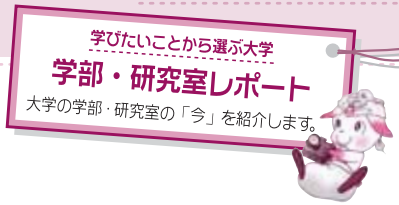
生活の中で役立つ
真の「学び」を考えたい

学校現場での教育については、どう思われますか。

現在の学校教育は、私に言わせると、少し変なんですよね。学校で勉強すること自体は大切なことです。でも、本来なら、身につけたことを通じて世の中が見えるようになっていたり、何かができるようになったりするのが当然なのに、それが無い。

身につけた力を生活の中で使うという発想が抜け落ちてしまっていますね。学校での学問は、試験のための学問になっているんです。

もちろん、昔から、勉強するのは試験のためだったかもしれません。でも、昔は子どもには学校以外の場所で、「生活」がありました。生活というのは家事、農事などです。しかし、ここ40



50年の間に、子どもにとっては勉強が仕事になりました。学んだことを活かせる場は、生活の中にはなくなり、試験だけになってしまったのです。

そもそも、社会へ出るという表現にも疑問を感じます。子ども時代は、大人になるための準備期間だと思われていますが、そうではないのです。力なんて、貯めるものではない。使わなければ意味がないのです。そして、今はその力を使う生活の場がない。試験でしか使っていないのです。

かつて子どもにとって、学校の位置づけは、サブでした。あくまでもメインに生活があつた。でも今は、学校が生活のメインです。ほかの部分は、代わりを見つけないことなく、なくなってしまうました。

だから、学校で体験することの中心をもっと変えていかななくてはなりません。なかには経済学習の一環として、「株」について教えている学校もありますが、その株がどう世の中に関わっているのかという部分は見えていない。またそれも問題なんですよ。

「子どもプロジェクト」は、そのような考えから始められたのですか。

あくまでも大学の中でのプロジェクトですから、できることは限られていますよ。でも、こういった問題を地域の人にお話して、知っていただく必要はあります。さらに、同様の取り組みをしている人も地域にいますから、彼らとも連携して活動しています。

具体的には、年に何回かの講演会、地域の小・中学校との連携ですね。ほかに映画会、研究会なども行います。

学生がそこで何ができるかは、また別の話ですが、とりあえず、現場に行行って自分の目でいろいろなものを見てもらいます。

学んでいる学生はどのように捉えていますか。

うちの学生は真面目ですから、こういう話をすれば、みんな言いますよ。「自分も何のために勉強しているのかわからなかったのが嫌だった」と。でも、そう感じていながらもそこから抜けられないんですね。一度走り出してしまうと止まる勇気が持てないんで

す。止まったら自分だけが置いていかれるから。遅れてはいけないという錯覚のレースが今も続いています。

その状況をとりあえずはわかってもらいます。学生のなかには教師になる人もいますから、問題を把握しておいてほしいと思います。ただ、教師の立場でも、できることは少ないんです。学校が教師が、いろいろな研修に、書類作りに忙しくて、子どもと接する時間がないのです。そんなことよりも、子どもと付き合う時間を作ったほうがいいはずなのに。

教師は、ただ教える仕事になってしまいました。子どもと触れ合う仕事ではなくなりました。しかし本来は、子どもと触れ合い、子どもにとって本当に必要なことを考えるのが、教師のいちばんの役割だったはずなのです。



子ども学プロジェクトにて
教師、学生、子どもが一緒に作り上げた田んぼ



SUMIO HAMADA



・・・先生からのMessage・・・

いまの生活世界に活かされてこそ、学んだことが「生きる力」として身につくのです。

子どもにとって必要なものは、例えばどんなものでしょうか。

今、子どもの世界は、この時代に最も必要な異世代間のつながりがなくなっています。同学年の輪切り集団です。それは、人間の成長の過程で不自然な環境なんです。

だから学校の中で、異世代が交流できる場が必要です。なぜなら、学校はみんなが共通して通う場所ですし、学校ほど多種な人がいる場はないですから。数年前から幼小連携校も増えつつありますが、システムではなく、小学6年生の子が3歳くらいの子と付き合えるような環境を日常的に作る必要があります。

もちろん、問題意識はみんなが持っていますから、行事としてはあります。小中学生が保育園に行ったり、老人ホームへ行ったり。でも、それは、ここ^aなんですよ。ここ^aではない体験のしかたを作るのは、なかなか難しい。

でも、できると思っんです。ぜひ、学校ですべきことだと学校に働きかけてもらえればと思います。

「自分の力で何かをする」

その喜びを子どもに体験させて

では、家庭でお子さんにさせてあげればよいことはあるでしょうか。

間もなく夏休みが始まりますね。地域での行事も行われるでしょう。そこに子どもと一緒に参加して、親子で異世代と交わってほしいですね。知らない人たちとの集まりにためらっている親御さんがいるかもしれませんが、子どもが仲立ちになってくれることもあります。

また、自分の力を使って何かするという体験をさせてあげてほしい。仲の良い親子複数組で、何も用意されていない場所へ野外体験などに出かけるといういかもしれません。文字通りの「サバイバル」体験です。そして、家で手当てができる程度のケガであれば問題なし、と思っつて、お子さんに何でも体験させてください。

自分の力を使って何かをし、人に喜んでもらうということは、うれしいことです。子どもは、お手伝いや奉仕ではないやり方で、この喜びを味わうこ

とが大切なのです。

他にも、週に1日、子どもの日を設定して、その日は子どもにご飯を作らせるのもいいですね。1000円なら1000円と予算を決めて、買い物からすべて任せる。とにかく、任せるというのがポイントです。それで子どもが、自分の力を使って人を喜ばせる喜びを体験できれば、素晴らしいことだと思います。身につけた力を使って、自分が役立っている感覚こそが、生活している証です。この経験が子どもを成長させていくと思います。

プロフィール

香川県生まれ。

京都大学大学院文学研究科博士課程修了。

花園大学教授を経て、現在は、奈良女子大学にて教鞭を振るう。専門は子ども学、発達心理学、法心理学。

主な著書に、『子ども学序説 変わる子ども、変わらぬ子ども』『ありのままを生きる』『告白の心理学』（岩波書店）、『赤ずきんと新しい狼のいる世界』（共編、洋泉社）などがある。知的障害児童が、証人として関わった甲山事件の供述分析にも携わる。

